

2月14日までの15日間をもって無事、終了しました。この研修は通称、環境考古学研修と呼ばれ、奈文研の専門研修の中でももっとも古い研修の一つです。数年前は3週間以上をかけて多岐にわたる講義内容を盛り込んでいましたが、いざこも出張旅費の削減のせいか、研修参加者が減ったため、最近は研修期間を2週間に短縮して参加者を期待しているところです。今回は定員を1名オーバーする17名の研修でした。

この研修の特色の一つは、外部講師が13名と多く、その分野も地質、植物、動物と広いことで、受講する側もたいへんだったろうと思われます。しかし、感想文を見る限りでは、この研修が有意義であり、現場で応用していきたいという意見が大半でした。

一方、2回の経験交流会に担当職員以外の奈文研からの参加者がほとんどなかったことが残念という感想もありました。 (埋蔵文化財センター)

速報展示「キトラ古墳壁画」

飛鳥資料館では、昨年の秋に藤原宮跡から出土した木簡の速報展（実物展示）をおこないました。それに続いて、今回2002年2月26日から3月24日までの期間で、昨年12月のキトラ古墳予備調査の際に撮影した画像の写真パネル展をおこないました。

この調査は文化庁が、キトラ古墳壁画保存のため実施したもので、文化財研究所が協力しています。

キトラ古墳については、2001年3月までに明日香村が学術調査をおこない、壁画の保存状態が大変悪いこと、崩落の危険性が極めて高いことが確認されていました。今回の予備調査は、こうした成果を受け、壁画の崩落を防止し保存処理を施すために、実際に石槨の内部へ人が入ることができるかどうかのデータを得ようとしたものです。したがって、撮影も南壁と盗掘坑のできるだけ正確な大きさを測ることに主な狙いを定めています。

しかし、挿入したカメラの位置や角度がこれまでの調査とは微妙に違っていたこともあり、いくつかの新しい画像を得ることができました。例えば、南壁の朱雀、西壁の白虎、東壁下方の人物像らしい像などは、より正面に近い角度から撮影ができ、全体の形がよくわかるようになりました。特に、人物像らしい像は、これによって顔が獸面とわかり、十二



東壁獸面人身像

支像の可能性が高くなりました。

飛鳥資料館では、新聞やテレビなどの報道機関を通じて広く一般に知られることになったキトラ古墳の壁画を、少しでも多くの方々に見ていただければとの思いから、この度、速報展示というかたちでの公開となりました。

(飛鳥資料館)

社会科学院考古研究所との共同研究

昨年8月、奈文研が中国社会科学院考古研究所との間で友好共同研究議定書を調印したことはすでにお伝えしたところです。その一環として、このほど劉慶柱所長以下5名の研究者が共同研究のために来日されました。一行は共同研究のあと、所内の新鋭施設や各地の遺跡・博物館などを見学し、3月15日に成田国際空港から帰国の途に就きました。



漢長安城出土玉牒